

一八八二年二月二十六日(日)

主の物語は甘露の如く 人の乾きし心をうるおせり

智慧ある者それを讃たえ またそれを聴く者は幸いなり

それ、美しく無限にして普遍なり またそれを語る者 心寛ひろ大な者なり

—— シュリーマツド・バーガヴァタ (ベールヴァタ・ブリーナ 第十巻 第三十二話 第九節) ゴーピー・ギーター ラーサ五章 ——

### 師との最初の出会い —— 一八八二年二月

ガンジスの岸辺ドッキネーシヨルのカーリー神殿。大実母カーリーを祀った大寺院である。

時は春。イギリス式に言えばキリスト暦一八八二年の二月。タクールのお誕生日から数日後のこと。

ケーシャブ・セン氏とジョセフ・クック氏と共に二月二十三日、木曜日、タクールは汽船で船遊びに

行かれたが、その何日か後である。夕方であった。タクール、聖ラーマクリシュナのお住まいに校長

はおうかがいした。これが初めての会見である。(原典註) (訳註、タクール——神、師、王、父を呼ぶことば)

みると、部屋いっぱいになった人びとが水を打ったように静まりかえって聖者の言葉にきき入って

いる。タクールは木製の小さな寝台の上に東向きに坐って、ニコニコしながら神様の話をしておられ

た。信者たちはみな、床の上に直接すわっている。

〔勤行を捨てるのはいつか?〕

校長は立ったまま、おどろいて見ている。彼は、ちょうどシユカデーヴァ(インドの理想的な出家者とされている聖者)自らが神の言葉を語っているかのようであり、またすべての聖地が、そこに集まっているような感じであった。また、聖チャイタニヤがプリーの野で、ラーマリーナンダやスワルーパ等の信者と共に坐って、神の御名を唱和しているかのようだ。(訳註、聖チャイタニヤ(1895-1933)——クリシュナを歌と踊りで讚美し信愛することを説いた大聖者。聖ラーマクリシュナは聖チャイタニヤの再来とも言われた)

タクルはこんな話をしておられる――

「ハリ(ヴィシヌ神の一名)や、ラーマ(ヴィシヌ神の化身とみなされている古代の英雄。ラーマヤナの主人公)の名を、一度でもとなえたら、たちまち体じゅうの毛が逆立って涙がポロポロこぼれる――こんなふうになれば、朝夕の定った勤行などはもうする必要がないと自分ではつきりわかるよ。そうなる

(原典註1)「マヘンドラ・グプタは、最初の出会いから四回目の訪問については日付けを記述していないが、そのヒントは残している。最初の訪問は2月23日の次の日曜日で、三回目の訪問も日曜日、四回目の訪問は翌日の月曜日である。四回目に訪問した日に校長にバララム・ボースの家に行くように言っているが、聖ラーマクリシュナがバララム・ボースの家に行ったのは3月11日の土曜日である。2月23日から3月11日までの日曜日は2月26日と3月5日であることから、最初の訪問は2月26日、三回目の訪問は3月5日、四回目の訪問は3月6日である。二回目の訪問は2月26日から3月5日の間のいずれかの日である。(以下補足――田中先生が翻訳されたベンガル語原典には日付けがはつきりと明記されているので、増版出版の際に後から日付けが付加されたものと推測される)

たら、勤行を捨てる権利ができたわけで——勤行の方で自然に消えていくもんだ。そのときはラーマの名か、ハリの名をとなえるだけでいいし、場合によってはオームをくりかえすだけでいい」

また、次のようにおっしゃった。

「サンディヤーはガーヤトリのなかに溶けこんでしまい、そのうちにガーヤトリはオームのなかに溶け込んでしまう」(訳註、サンディヤー——昼と夜の接合時〓朝と夕に行う祈り。ガーヤトリ——バラモンの男子が一日に三回、定期的にくりかえすヴェータの中の聖句)

校長は、シドゥ(原典註)と共にバラナゴルの町のこの庭あの庭とめぐり歩いてから、ここに入ってきたのである。今日は日曜日——二月二十六日、ベンガル暦でファルグン月(二―三月)の十五日——休暇があったので、散策にきたのである。はじめプラサンナ・バルジェ氏の庭園をしばらく散歩していたのだ。そのときシドゥが、「ガンジスの川つぶちに素晴らしい庭園があるんですが、そこへ行ってみませんか？　そこに、聖者がひとり住んでいらっしやるんですよ」と言ってさそったのである。庭園の正門を通って、校長とシドゥはまっすぐに、タクル、聖ラーマクリシュナのお部屋に行った。

校長は、なんとも言えぬ感動に体がしびれたようになって、戸口のそばに立ったまま茫然と部屋のなかを見まわしていた。そして思った——「ああ、良いところだなあ！　すばらしい人だ！　そしてまた、何ですばらしい言葉なんだろう！　ああ、もうここから動きたくない」

しばらくして、心の中でつぶやいた——

「そうだ、まっすぐこの部屋に来たから——一度どんどこるか寺全体の様子をよく見てきて、それ

からここに戻って坐りこもう」

シドゥといつしよに部屋を出ると、夕べの祈り(テラテイ)の甘美な調べが聞こえてきた。鈴、太鼓、どら、カルタル(小さいシンバル)の合奏である。庭園の庭の南隅からも、心地よいシャーナイ(縦笛)の音が聞こえてくる。その音はガンジス河の胸の上をさまよいながら、遥か彼方へと流れて溶けてゆく。かすかな花の香りを運ぶ春風！折しも月が上りはじめて——神々への礼拝の条件が、四方すべてとのつたかのようなものである！

校長は、十二のシヴァ堂やラーダーカーンタ堂、およびカーリー堂での献灯<sup>アトラチイ</sup>勤行を拝観して、満ち足りた気持ちになった。友人のシドゥがいろいろと説明してくれた——

「これはラースマニ夫人の建てた寺でしてね。毎日、礼拝供養が行われているんですよ。参拝者や乞食なんかが大勢やつてきます」

話をしながらカーリー堂から広い煉瓦敷きの境内を通って、二人は再びタクル、聖ラーマクリシュナの部屋の前にきた。見ると、こんどは部屋の戸がしまっている。樹脂香が、今、焚かれたばかりのようであった。

校長はイギリス式の教育をうけているから、他人の部屋に無断で入っていくことはできない。戸口

(原典註2) シドゥ——シッデーシユワル・マジユンダール、バラナゴルの北に家がある。(以下補足) シドゥはマヘンドラ・グプタの甥<sup>ボク</sup>で、ラーマクリシュナの医者イシャン・カヴィラージに嫁いだ姉の息子。

に女中のプリンデが立っていたので、「あのう、ご出家はまだ中におられますか？」とたずねた。

プリンデ「はい、この部屋にいらっしやいますよ」

校長「ここにはどのくらい長く住んでおられるのですか？」

プリンデ「そりゃ、ずいぶん長いあいだですけど——」

校長「そうですか。——それで、そのかたは書物を沢山お読みになつておられますか？」

プリンデ「書物だなんて！ みんなお口の中にあるんですよ！」（訳註、みんなお口の中にある——その人の内側から出てくる言葉という意味でベンガル人独特の言い回し）

校長は今まで、すべて書物をつかつて勉強してきたので、タクール、聖ラーマクリシュナが書物を全然読まないと聞いて、すっかり驚いてしまった。

校長「そうですか……。しかし、今は夕べのお祈りの時間でしよう？——私どもがお部屋に入つてよろしいでしょうか？ あなた、ちよつと取り次いでくれませんか」

プリンデ「かまいませんよ、お入りなさいな。入つてお坐りなさいまし——」

という次第で、部屋のなかに入つてみると、そこにはもう他の人は誰もいなかった。タクール、聖ラーマクリシュナが独りで木製の寝台の上に坐つておられる。香がたかれていて、ほかの出入口はみな閉まつていた。校長は入ると手を合わせて、タクールにご挨拶した。タクールが坐れとおっしゃったので、彼とシドゥは床の上に坐った。タクールは、「どこに住んでいる？ 何をしている？ バラナゴルに何しに来た？」などなどの質問をされた。

校長は質問にみな答えた。だが彼はタクルルが時どき放心状態になるのに気がついた。後になって、これが前三昧バウツァとよばれる意識状態なのだということを聞き知った。

人が竿を手にして魚を釣ろうとして坐る。魚がよつてきて餌にくいつくと、ウキが動く。彼は全心を集中して竿をにぎりしめ、ウキを凝視していて、誰とも話をしようとしなない。このような心の状態が前三昧バウツァだ。後に人から聞いたり、また実際に自分の目で見たことなのだが、タクルルは夕暮れ頃にはこのような前三昧状態になり、時には外界に対する意識を全くなくされるのである！

校長「夕べのお祈りをなさるのでしたら、私ども、すぐおいとま致しますが……」

「聖ラーマクリシュナは前三昧のまま、

「ンにゃ——夕べの祈り——そんなんじゃないんだよ」

それから、何ほどか話しあつてから、校長は拜をしておいとました。タクルルはおっしゃつた。

「またおいで」

校長は家に帰る途みちすがら、こんなことを考えていた。

「この、聖なる人物は、いったいどういう人なのだろう？　すぐにでもまた、そばに戻っていききたいようだ。——書物ほんを勉強しなくとも人間は偉くなれるものだろうか？　驚いたなあ、また来なくちゃ。

そうだと、あのひとも、『またおいで』つておっしゃつたのだから——。明日か明後日の朝、また来よう」